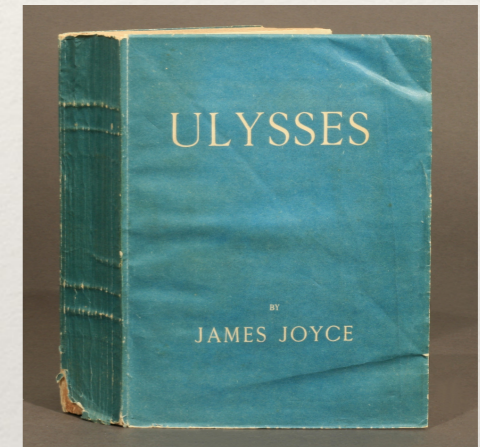


2022年の『ユリシーズ』—スティーヴンズの読書会

第1挿話 Telemachus



目次

❖ 【受付開始】 13:15~13:30

❖ 【第1部】 13:30~

注意事項・前回の復習・第1挿話の読み方

❖ 【休憩】 14:30-14:40

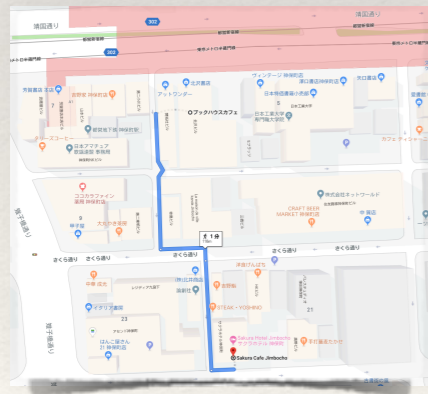
❖ 【第2・3部】 14:50~15:50; 15:50~16:00, 16:00~16:50

(1) 塔の上 (2) 塔の中 (3) 塔の外

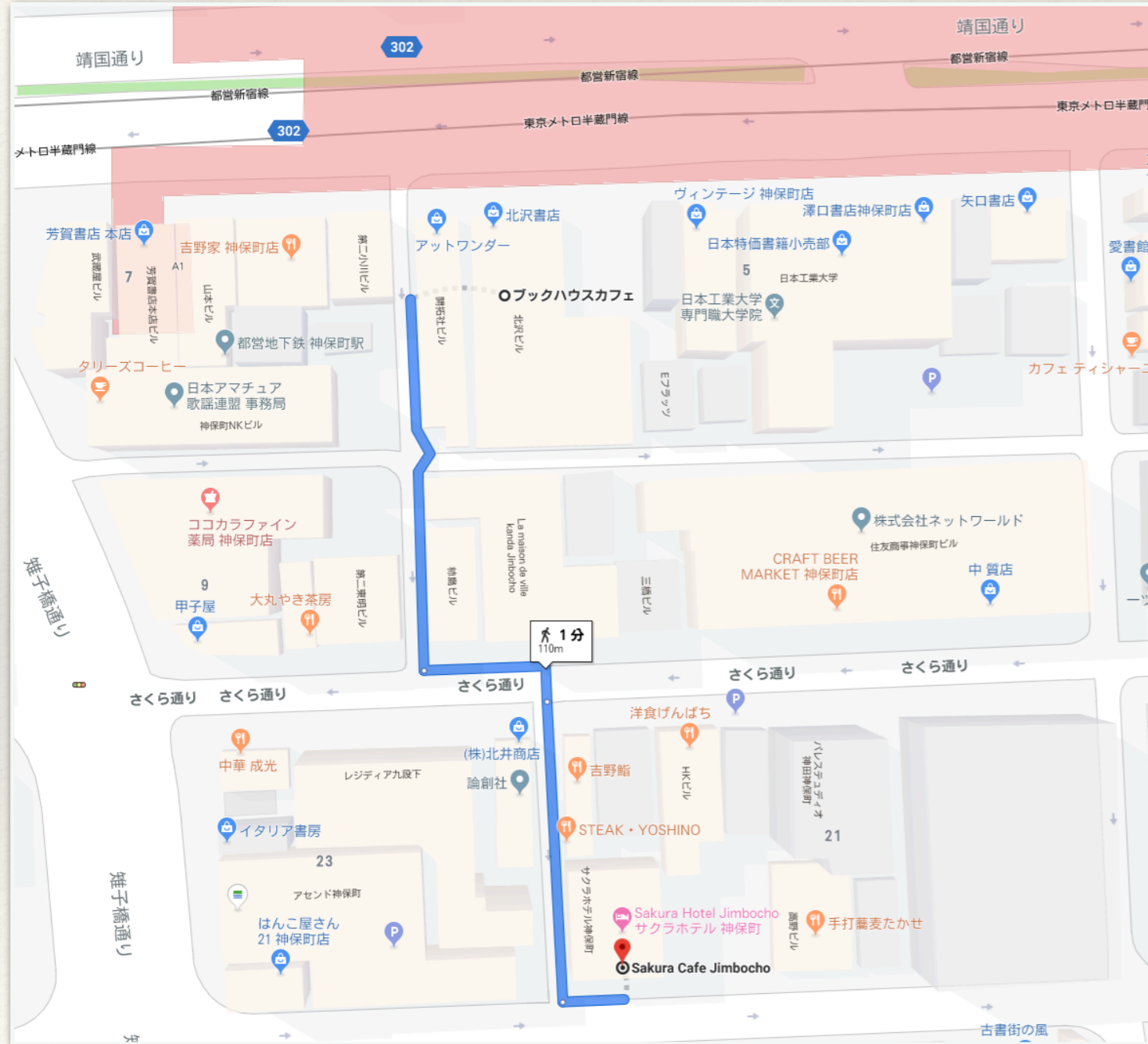
❖ 【懇親会】 17:30~20:00

はじめに

- ❖ 会場内での写真撮影とSNSの掲載についてのお願い
- ❖ 店内禁煙・喫煙場所
- ❖ 500円の参加費用途
- ❖ 懇親会会場サクラカフェ神保町（17:30~）



懇親会会場サクラカフェ神保町 (17:30~)



配布資料

- ❖ 記念ポストカード
- ❖ 領収書兼名札（記名の上、山折りにして机の上に置いてください。懇親会では二つ折りにしてカードホルダーに入れてご使用ください）
- ❖ カードホルダー（お帰りの際に、ご返却下さい）
- ❖ 第4挿話の言葉の地図（表）とダブリン湾の海岸地図（裏）
- ❖ 第1挿話：鼎訳と柳瀬訳の比較（両面）
- ❖ 第1挿話のあらすじ（片面）

『2022年のユリシーズ』読書会予定表

第1回 2019年6月16日	第4挿話 カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話 テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話 ネストル	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話 プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月	第5挿話 食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2019年4月	第6挿話 ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年6月	第7挿話 アイオロス	Book II. Odyssey	
第8回 2020年8月	第8挿話 ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	
第9回 2020年10月	第9挿話 スキュレとカリュブデイス	Book II. Odyssey	
第10回 2020年12月	第10挿話 さまよう岩々	Book II. Odyssey	
第11回 2021年2月	第11挿話 セイレーン	Book II. Odyssey	
第12回 2021年4月	第12挿話 キュクロプス	Book II. Odyssey	
第13回 2021年6月	第13挿話 ナウシカア	Book II. Odyssey	
第14回 2021年8月	第14挿話 太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第15回 2021年10月	第15挿話 キルケ	Book II. Odyssey	
第16回 2021年12月	第16挿話 エウマイオス	Book III. Nostos	
第17回 2022年2月	第17挿話 イタケ	Book III. Nostos	
第18回 2022年4月	第18挿話 ペネロペイア	Book III. Nostos	
第19回 2022年6月16日	記念イベント？		

明石書店ウェブ連載企画（毎月更新）

「ジョイスの手ーはじめての『ユリシーズ』」



Webあかし（明石書店webマガジン）

<https://webmedia.akashi.co.jp/posts/2007>

ジョイスと不滅のダブリン

- ❖ ある日突然ダブリンがこの地上から消滅してしまっ
たとしても、この本からその街を再現できるくらい
完璧にその都市の光景を描きたいんだ」 (Jが友人の
画家に語った『ユリシーズ』の構想； Frank
Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses*, 69)
- ❖ 「あいつは砂漠のど真ん中に放り出されても、座
りこんでそこの地図を作るだろうな。」 (寄宿学
校の息子の振る舞いに対する父ジョン・ジョイス
の言； Richard Ellmann, *James Joyce*, p. 35)

ジョイスは『ユリシーズ』が世紀を越えて読まれるようにその作品を書いていた。しばしば紹介される引用のひとつには、彼がジャック・ブノワ＝メシヤン（1901-1983）に語ったとされる次の言葉がある—「『ユリシーズ』にはきわめて多くの謎や仕掛けを取り入れたので、私が意味することをめぐって大学の教授たち（“professors”）が何世紀にもわたって議論することになるでしょう。それが不滅の名を獲得する唯一の方法なのです」。 （1/4）

出典：南谷奉良「3年後への序文—『ユリシーズ』出版100周年に向けて」2019.06.07 web
あかし <https://webmedia.akashi.co.jp/posts/2007>

ジョイスの狙い通り、初期の研究者や愛好家はこの言を頼りに、多大なエネルギーを払って彼のつくりあげたダブリンを何度も再訪し、膨大な量の解釈と注釈を煉瓦のごとく積み上げてきた。いまの私たちが『ユリシーズ』やその読み方を幾分たりとも俯瞰的に眺めることができているのは、玉石と塵芥の混ざった、文字通り山のような先行研究の上に立つことができるからである。しかし21世紀現在、もし今もなおジョイスが生きていて、引き続き同じ言を口にして不滅を望むのであれば、その“professors”の部分には太い赤線を引き、冒頭のアンケート結果とともに彼に突き返さねばならない。(2/4)

出典：南谷奉良「3年後への序文—『ユリシーズ』出版100周年に向けて」2019.06.07 web
あかし <https://webmedia.akashi.co.jp/posts/2007>

デクラン・カイバートに同意して述べれば、『ユリシーズ』は、「ふつうの人々が送っている日々の生活の現実を祝福するために書かれた」、「ふつうの生活に隠れている驚異的な要素を解き放つことで、ありふれたものが驚嘆すべきものになる」信念にもとづいた作品である(*8)。本来の住民たる読者を視野に入れなかったために起こったのが、カイバートが指摘する「『ユリシーズ』は一般読者の手から奪われてしまった」という皮肉な結果であった。(3/4)

出典：南谷奉良「3年後への序文—『ユリシーズ』出版100周年に向けて」2019.06.07 web
あかし <https://webmedia.akashi.co.jp/posts/2007>

今後もテキストが読まれる場所を大学や研究機関に閉ざすのであれば、今は活気があるその街も次第に朽ち果て、ついには周りに何も無い砂漠に取り残された、かつての権威を空しく誇る巨大な廃墟となるだろう。少なくとも私は1人でその廃墟に閉じこもり「『ユリシーズ』は読まれていない…」と肩を落として嘆くようなことはしたくない。だからいま、その本から差し出されている「手」を示し、その手をつかむための方途を示したいと思うのだ。(4/4)

出典：南谷奉良「3年後への序文—『ユリシーズ』出版100周年に向けて」2019.06.07 web
あかし <https://webmedia.akashi.co.jp/posts/2007>

ジョイスと不滅のダブリン

しかし2019年のダブリンにも作品に出てくるものが残っているという、そのことが永遠なのではなくて、1904年6月16日のダブリンが行間の後ろにそっくりそのまま存在するように読めるということが永遠なのだろうな。『ユリシーズ』の背後には、街が壊れようが地球が滅びようが関係ない、不動のダブリンがある。たまたま2019年にもほとんど残っているけど、たとえ戦争や災害で街が壊滅状態になっていたとしても、『ユリシーズ』のダブリンは無傷で残っていることになるので、現実の街がどうなろうとあまり関係ないのでしょ。それは『ユリシーズ』のダブリンがジョイスにとってのダブリンだからであって、『ユリシーズ』を構成する一語一語が元素のように、ジョイスのダブリンを形作っているのだと思う。

出典 kino 「『2022年の「ユリシーズ」』の読書会（第一回：第四挿話）に行ってきました」
『好物日記』, Hatena Blog, 2019年6月23日 (<https://kinokeno.hatenablog.com/?page=1561814196>)

ジョイスと不滅のダブリン

- ❖ ジョイスの『ユリシーズ』が減びることはないとしても、その作品を読む読者がいなければ、小説のなかのダブリンも、現実のダブリンも活気が減る。
- ❖ 「読破できない『ユリシーズ』」という伝説的な逸話は、専門家集団の牙城をつくりだす方便として機能してしまっている。それを繰り返しているうちに、小説のなかの街の周辺が砂漠化する。
- ❖ ジョイスのダブリンを本来的に不滅するのは、そこに秘められた謎そのものではなく、それを発見・解読しようとする読者の元気。

→本読書会の方法①：OutisとCoggleのメディアを用いることで、読者が物語と人物と出来事をリアルタイムで、発見的に結びつけながら、『ユリシーズ』の「言葉の地図」をつくっていく。

→本読書会の方法②：身体をもった生活者として、個人の生とともに『ユリシーズ』を読むことで、「ふつうの生活に隠れている驚異的な要素を解き放つことで、ありふれたものが驚嘆すべきものになる」ことを発見する。

第4挿話の復習

第4挿話の言葉の地図

テーマ 登場人物 関連事項

📌 (1) 第1挿話との対比 (2) 「意識の流れから隠れる事実」 (3) 『ユリシイズ』における「ユダヤ的」要素 (4) 植民地アイルランドと独立の問題 (6) ブルームの商い・貨幣経済に対する関心 (7) ブルームの身体的生理と排便の描写 (8) ブルームの動物に対する態度 (9) ブルーム家の生活空間におけるモノ (10) ブルームの科学的知識 (11) 市民生活とそこから疎外される存在 (12) 語りにおけるリズムミカルな音や首韻の仕掛け (13) ホメリック・パラレル (14) 人間が食べるもの、猫が食べるもの (15) 輪廻転生のモチーフ (16) 1904年6月16日の天気 (17) 小説における糞尿・排便描写

**metempsychosis (柳瀬訳: 「会者定離輪廻」)

→ "metpikheoses" (p.266)

排便・糞尿・排泄物

庭に肥料(鶏の糞・牛の糞)をまいて、「豊穡」の地を考えるブルーム (p.122)

ブルーム、「ティッドピッツ」誌を読みながら、排便をする: 3段半(一段(column)につき1ギニーの原稿料)の原稿量と排便量の対応: 臓器による連関: ブルームの腎臓と排尿

手紙

ミリーからブルームへの手紙
ボイランからモリーへの手紙

腰の曲がった老婆

ブルームの思念「不毛の地、何一つ生えない荒地」(p.110)の直後、アッパー・ドーセット通りの酒店キャシディの店から出てくる老婆: 「荒廃」の主題とブルームの性的不安

1904年6月16日の天気

同一語句の反復による雲の描写と第1挿話との時間的対照: 「雲が一つ、太陽をゆっくりと覆い始めた」→ (p.110) 「雲がゆっくり動いてすぼり覆い」(p.21): 挿話中に挿入される天候描写の導入 (pp.101, 103, 104, 106, 108, 110, 111, 121, 124) → 「そろそろ洗濯物を外へ吊るす頃だが」(p.121)

ホメリック・パラレル

サンダル履きの足で、俺を出迎える娘、金髪を髪になびかせて (p.111)

壁に掛かった「ニンフの湯浴み」の絵: (ギ)女神カリュプソと囚われのブルーム

第1挿話との「対応」

ブルームとスティヴンの対比: 母親の肝臓とブルームの動物好き: 動物 (beast) に対する扱いの違い: スティヴンは観念的・形而上的なもの、ブルームは身体的・日常的なもの、モリーは感覚的・肉感的なものに結びついている: スティヴンが鍵を閉めることと、鍵を閉めないブルームの対比→鍵をもっていない主人公のテーマ

隣の家の鶏

「雨が降らないと、いい卵はない」(p.103)

1889年実際の作品をもとにしたサーカスを舞台とした小説 Rudy, Pride of the Ring

Molly (Marion) Bloom

男性器のイメージ→生殖・モリーのボイランとの情事: 口を尖らせたポット: ミルクを注ぎ込む紅茶のポット

Hugh Blazes Boylan

Milly Bloom

ブルームからベレー帽の誕生日プレゼントを受け取る
ブルームとモリーの娘、15歳: 6月15日生まれ: マリンガーの写真店で勤務: 運船12シリング6ペンス

Banon

ミリーとピクニックの約束

Coghran

写真店オーナー

ハンロン牛乳店の配達人

郵便屋

Leopold Bloom

官能的なものへの関心
Paul de Cockの本と名前
ボイランからの手紙
ベチコート: ヘアピン: スロース

Milly Bloom

ブルームからベレー帽の誕生日プレゼントを受け取る
ブルームとモリーの娘、15歳: 6月15日生まれ: マリンガーの写真店で勤務: 運船12シリング6ペンス

Banon

ミリーとピクニックの約束

Coghran

写真店オーナー

暗闇で光るヒゲ
宝石のような緑の瞳
「おバカな」猫のイメージ
伝染病と猫の実用性
白いボタンのようなお尻
「洗濯ソーダで荒れた手」
ざらざらの猫の舌
ブルーム家の猫
猫語 (Mrkgnao)
ブルームの間違った科学的知識
血とミルク→コーシャー
ネズミを弄ぶ「残酷さ」

ウッズ家の女中

ブルームの「尻」への関心

排便
朝食の準備
猫の世話
尻のポケット
部屋の片付け
「サウンド体操」と健康への意識

Leopold Bloom

ハングラマー・サーカス団の思い出
買物
ゲイヘル通りの図書館への本の貸出延期
ディグナムの葬式
モリーとボイランの密会についての理想
ミリーと愛蘭号に乗船した思い出

Larry O'Rourke

前掛け姿のバーテン
市の交通のちょうど終点にある、立地のよい酒場を営む

Paddy Dignam

Rudy Bloom

ブルームからベレー帽の誕生日プレゼントを受け取る
ブルームとモリーの娘、15歳: 6月15日生まれ: マリンガーの写真店で勤務: 運船12シリング6ペンス

ユダヤ人・ユダヤ教・ユダヤ性

Moses Dlugacz

膝々の血: コインを飲み込む
商人の指 (舌)
コーシャー
「サウンド体操」と健康への意識

Leopold Bloom

ハングラマー・サーカス団の思い出
買物
ゲイヘル通りの図書館への本の貸出延期
ディグナムの葬式
モリーとボイランの密会についての理想
ミリーと愛蘭号に乗船した思い出

Larry O'Rourke

前掛け姿のバーテン
市の交通のちょうど終点にある、立地のよい酒場を営む

Paddy Dignam

Rudy Bloom

ブルームからベレー帽の誕生日プレゼントを受け取る
ブルームとモリーの娘、15歳: 6月15日生まれ: マリンガーの写真店で勤務: 運船12シリング6ペンス

ブルーム家の家具・所持品

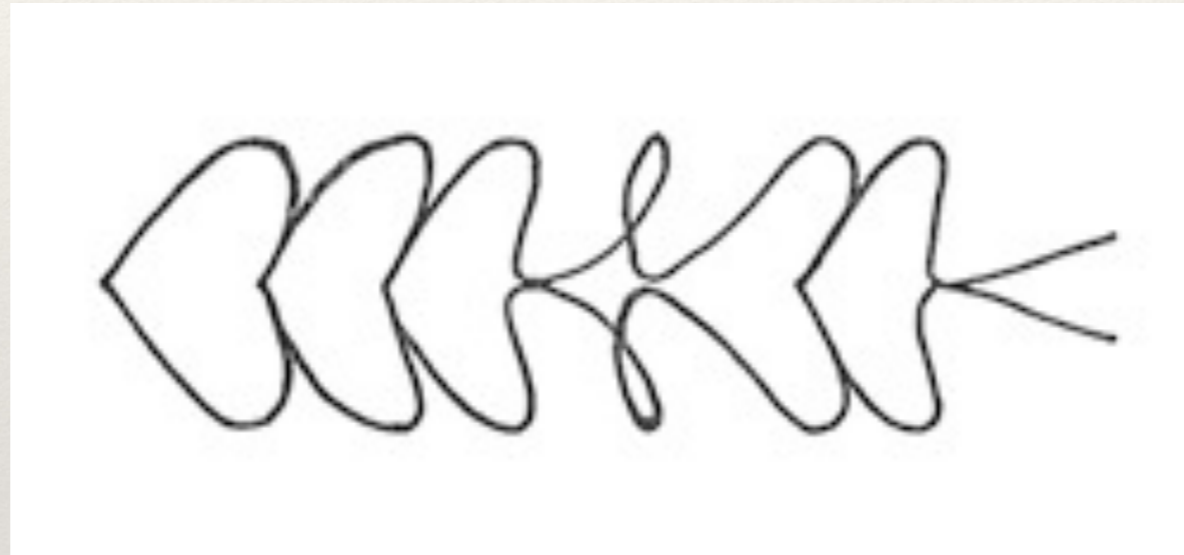
- ・ブラストウ高級帽
- ・遺失物取扱所の古物防水服
- ・ブルームのズボンとベルト
- ・厚ぼったい外套
- ・ティースプーン・フォーク
- ・ティーポット
- ・蓋付きカップ (ミリーがくれた誕生日プレゼント)
- ・紅茶のコップ・猫のミルク皿
- ・表戸の鍵・ポケットのなかのジャガイモ
- ・『ティッドピッツ』の古い号
- ・緑の欠けた茹で卵入れ
- ・でこぼこしたお盆
- ・修理が必要なベッド (オークションで競り落とした嫁入り道具)
- ・オレンジの鍵模様の室内型便器と壊れた室内型便器
- ・ブルームの書物机
- ・庭の壁際に生えているスペアミント
- ・アンドルーズの店のオリーブの実
- ・バター・パン
- ・ハンロン店配達人のミルク
- ・台所のテーブル
- ・台所の湯沸かし
- ・調理用暖炉の石炭

ブルームのポケット

- ❖ 戸口段で尻ポケットに手を入れて表戸の鍵を探った。おや、ない。脱いだズボンに置左離に。取ってこなくては。じゃがいもは持ってるな (p.104)
- ❖ 片手でじんわり柔らかな臓物を受け取り、脇ポケットに滑り込ませる。その手がズボンのポケットから硬貨を三枚運び上げ、ゴムの棘々皿に置いた。 (p. 109)
- ❖ ちらしをたたんでポケットに突っ込み、エックルズ通りへ入り、早足に家へ急ぐ。 (p. 111)
- ❖ 本をがさがさっと内ポケットに押し込め、壊れたほうの室内便器に爪先をぶっつけ、匂いに向って駆け出して、鶴のあたふた歩きみたいに階段を駆け下りる。

第1挿話の読み方①

「それ」はいつも「それ」以外のもの



第1挿話の読み方①

「それ」はいつも「それ」以外のもの

- ❖ ぴよんぴよこ快活、いかにも牡鹿らしい (p.12)
- ❖ バック・マリガンは片方のさっぱりした頬を右肩ごしに見せた。 (p.13)
- ❖ 後ろ。誰かいるかも。
肩越しに顔を向ける。後方後顧紋 (rere regardant) 。 (p.95)

*rere regardant: 紋章学用語で、動物が後ろを振り返って見る姿勢



第1挿話の読み方②

「？」と思う部分をいったん更地にしてみる

バック・マリガンはため息をつき、両側にバターをこってりぬったパンをほおぼってから、両足を前へ伸ばし、ズボンのポケットを探りにかかった。(p. 31)

下線部を削除してみると....

バック・マリガンはため息をつき、両側にバターをこってりぬったパンをほおぼってから、ズボンのポケットを探りにかかった。(p. 31)

第1挿話の読み方③

ある記述の後ろには「別の記述」が流れている

雲がゆっくりと動いて、太陽をすっぽり覆い、
雲が一つ、太陽をゆっくり覆い始めた、
湾をさらに濃い深緑に翳らせた。
すっぽりと。灰色。まだ遠い。

パンに、バターに、蜂蜜だ...砂糖はどこ
バターを塗ったパン、4枚、砂糖、ス
だ？なんだ、ちえッ、ミルクはまだか。
プーン、いつものクリーム。よしと。

ほんの一匙分の紅茶が入ると、とろっと濃い
ミルクがかすがに濁る。

紅茶のなかで固まっていく。

第1挿話の読み方④

「スティーヴン嫌い」を克服する

- ❖ I am always surprised to find myself cited, from time to time, the bellwether of the Stephen-hating school of critics. It is clear that Stephen is not hateful, though he is irritating when he is being put forth ... as an authentic genius." (Hugh Kenner, "*Joyce's Portrait - A Reconsideration*," p. 360)
- ❖ "I . . . have been amused, stimulated, charmed, interested by the first 2 or 3 chapters—to the end of the Cemetery scene; & then puzzled, bored, irritated, & disillusioned as by a queasy undergraduate scratching his pimples." (*The Diary of Virginia Woolf*, 5 vols., D 2: 188-89)

新しい“new”

「歌人の鼻拭い！ われらがアイルランドの詩人諸君にふさわしき新しき芸術の色だ。青っ洩緑味もするんじゃないだろうか、え？）—The bard’s noserag! A new art colour for our Irish poets: snotgreen. You can almost taste it, can’t you? (U 1. 73-74)

「我ら自身の為……新しき異教主義……中心なる臍」 (p. 18) To ourselves new paganism *omphalos*. (U 1. 176)

虱の血—agenbite of inwit—洗われていない身体—

「まだここに染みが」

子供たちの下着に跳ねる蚤をつぶして赤く染まった形のよい爪。 (p. 23)

独知の噬臍。良心。まだここに染みが。 (p. 32)

あの、赤い結婚が前より大きさを増したのはなぜだろう？ それは恐ろしい病気のように、皺のよった指にまでも這いひろがっているように見える。絵にかかれた両足にも血がついている、まるで絵が血をしたたらせているみたい—さらにナイフを握らなかったほうの手にさえ血がついているではないか。自白？ 自白をしろという意味だろうか？ (オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』渡辺純訳、pp. 333-34)

アイルランド語の衰退



Ed Sheeran, "Galway Girl" (2017) (<https://www.youtube.com/watch?v=87gWaABqGYs>)

アイルランド語の衰退

「そんでわたしは恥ずかしいんですよ、自分がしゃべれねえもんでさ。知ってる人に言わせると大層な言葉だそうで。」 (p. 30: "...I'm ashamed I don't speak the language myself. I'm told it's a grand language by them that knows." U 1. 434-44)

アイルランド語の衰退

- 1851 CensusでIr語話者数を初めて記録する試み
- 1870 Irish National Teacher's Organization (INTO)
- 1877 Society for the Preservation of the Irish Language 結成
- 1893 Gaelic League 結成
- 1913 National Universityに入るのにIr語が必要になる

Table 2 Irish-speaking population 1851–1901

Census date	Total population	Speakers of Irish only		Total Irish speakers ¹	
		No.	%	No.	%
1841	8,175,124	Not enumerated		Not enumerated	
1851	6,552,365	319,602	4.9	1,524,286	23.3
1861	5,798,564	163,275	2.8	1,105,536	19.1
1871	5,412,377	103,562	1.9	817,875	15.1
1881	5,174,836	64,167	1.2	949,932 ²	18.2
1891	4,704,750	38,121	0.8	680,174	14.5
1901	4,458,775	20,953	0.5	641,142	14.4

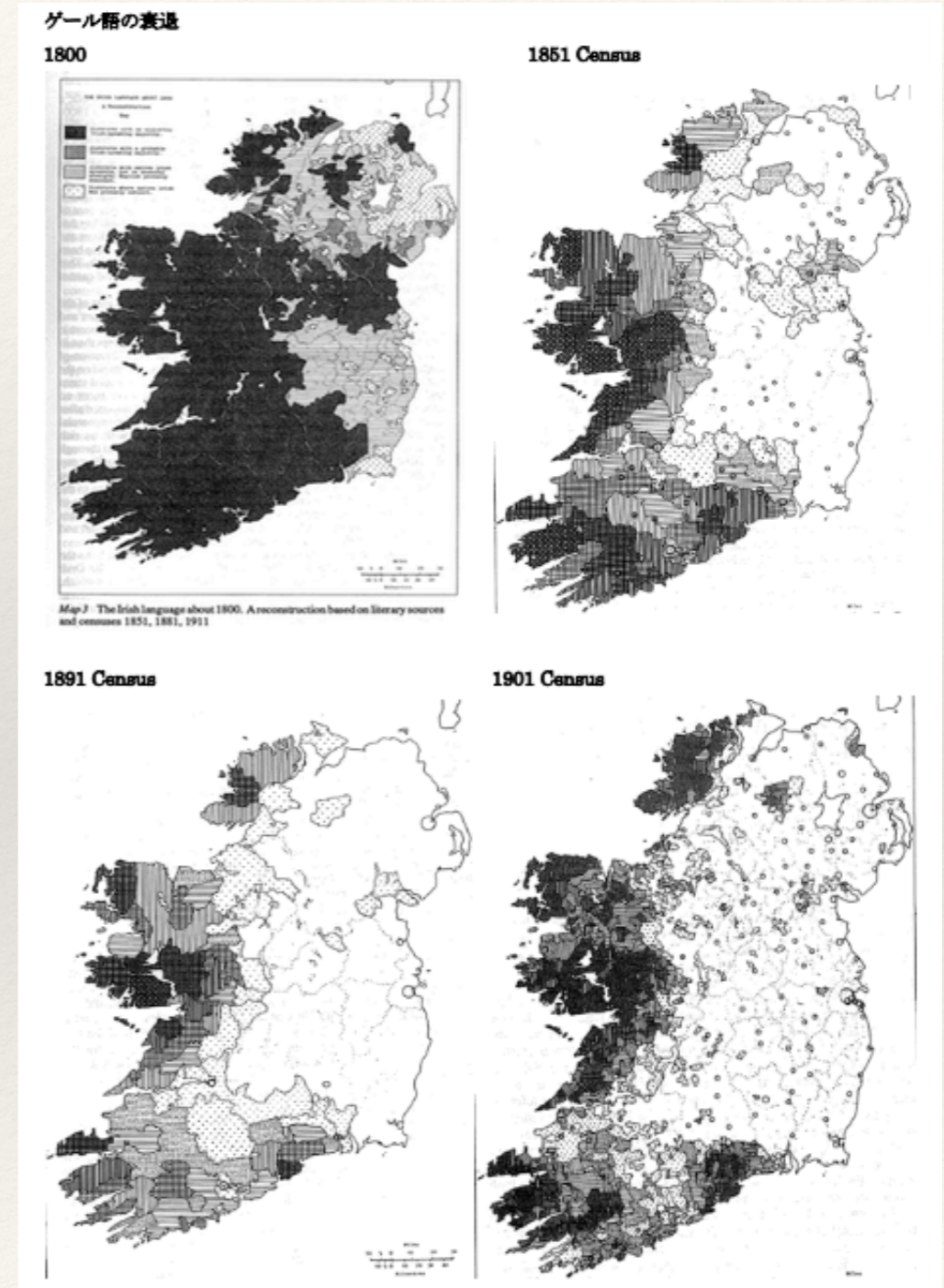
Notes

¹ Including Irish only.

² Increase in totals of Irish speakers because of improved method of enumeration. See above, pp. 14–15. The numbers of speakers of Irish only were corrected *downwards* before publication – after scrutiny.

Source: Census Reports.

(Reg Hindley, *The Death of the Irish Language*, p. 19)



(Hindley, p. 9, 16, 18, 22)

新しい“new”

しかしながら、この言葉が広く用いられたことと並行して、またその人気にどこまでも迫りながら、「新しい」という形容詞が使われはじめた。その使い方も同じで極端な近代性をあらわそうとするものだった。それは世紀末と同じくフランスに由来するもので、最初新しい芸術という言葉で用いられて以来、フランスでは近代的な絵画や服飾、デザインなどの接頭語としてかなり役に立ったのではあるが、その後イギリスのジャーナリストたちは、この便利な形容詞が他のものにも同じように使えることに気づいたのであった。グラント・アレンは「新しい享楽主義」について書いている。H. D.トレイルは、「新しい小説」について下記、「新しくないということは、今日ではつまらないということである」という言葉でその論文を書き始めている。（ホルブルック・ジャクソン『世紀末イギリスの芸術と思想』澤井勇訳, 19-20頁）（1/2）

新しい“new”

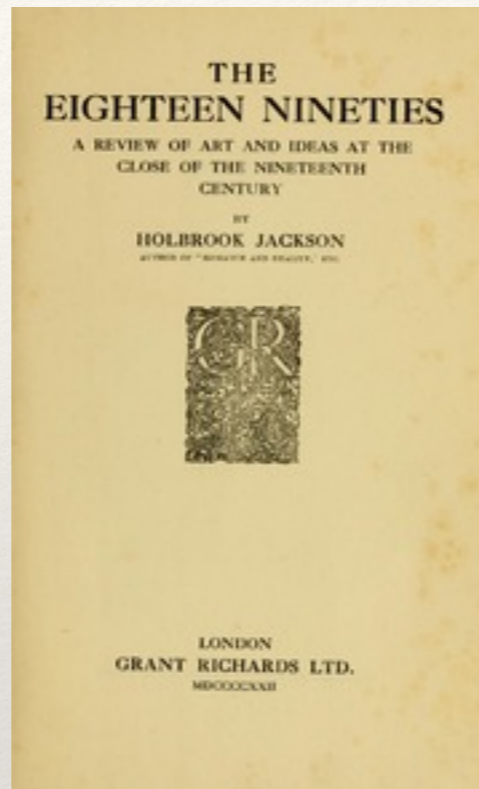
1892年2月、ウィリアム・シャープは『ペイガン・レビュー』の発刊を計画し、いろいろなペンネームを用いてもっぱら自分ひとりで書いた創刊号だけに終わったけれども、それは、「《若い世代》に活気を与える強力な潜勢力となり、事物の新しい表現にかかわるだけのものにすぎない」と言っている「新しい異教主義」をおしすすめるためであった。……この形容詞の適用範囲はしだいに広がって、時代全体のいろいろな思想を包み込むまでになった。「新しい精神」、「新しいユーモア」、「新しいリアリズム」、「新しい享楽主義」、「新しい演劇」、「新しい労働組合主義」、「新しい女性」などについての言及は無数に見られる。人気を博していまや「重要な」とも言うべきこの形容詞は、各種の定期刊行物を出版する人たちも採用した。人道主義的で急進的な目的をもつた1ペニーの週刊誌『ニュー・エイジ』はあの10年間に出了たものであるが、さまざまな浮き沈みと編集上の偏向を経ながらなおも生き残っている。

(ホルブルック・ジャクソン『世紀末イギリスの芸術と思想』澤井勇訳, 19-20
頁) (2/2)

新しい“new”



George Holbrook Jackson (1874 – 16 June 1948)



JACKSON, (George) Holbrook (1874–1948) English journalist, man of letters and bibliophile. He helped to establish the political and literary journal *New Age* with A.R. Orage. He was active in the Fabian Society and published a number of books, including a biography of George Bernard Shaw (1907).

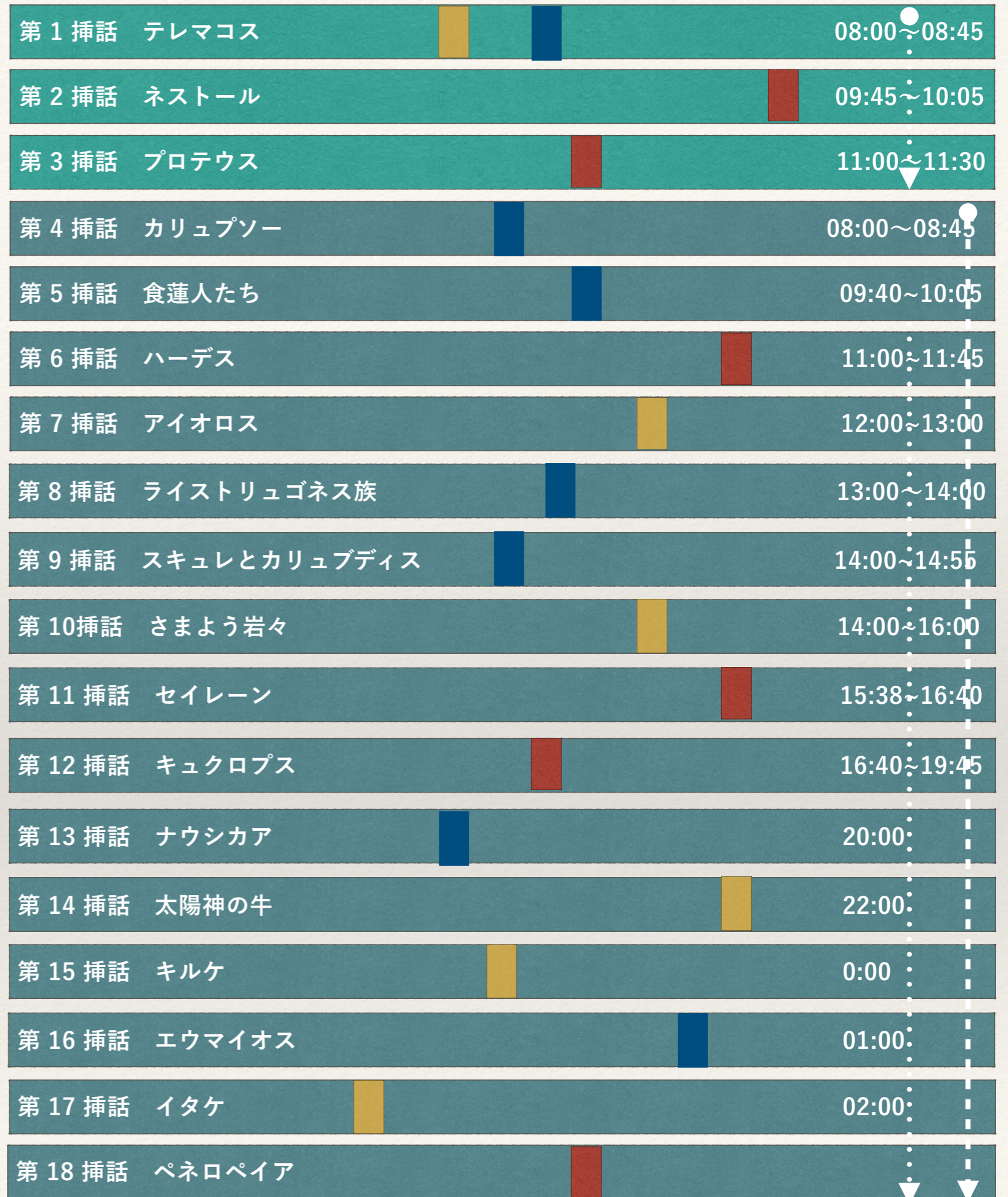
LEOPOLD BLOOM in James Joyce, *Ulysses* (1922)

'From the author of *Ulysses* himself, I learned what Mr Bloom looked like. Joyce asked me one day if I would write to Mr Holbrook Jackson . . . and ask him to send me a photograph of himself. . . . Joyce didn't say that he and Jackson had ever met, but I imagine they had. . . . The photograph arrived. I showed it to Joyce. He scrutinized it at some length and seemed disappointed; then, handing it to me, he said: "If you want to know what Leopold Bloom looked like here is someone who resembles him. But," he went on, "the photo is not a good likeness. He doesn't look as much like Bloom in it." Anyhow, I kept the photograph carefully; it was the only one of Mr Bloom I ever had' (Sylvia Beach, 1960, *Shakespeare and Company*, p. 97; the photograph is reproduced as Pl. 16).

M.C. Rintoul, *Dictionary of Real People and Places in Fiction* (1993), p. 539

Jackson, Holbrook. *The Eighteen Nineties: A Review of Art and Ideas at teh Close of the Nineteenth Century* (1913) (『世紀末イギリスの芸術と思想』 澤井勇 訳、松柏社)

『ユリシーズ』 の時間



「それ」はいつも「それ」以外のもの

聖ジョージ教会の鐘たちが夜の時刻を告げる大音響。
両者はそれぞれ鐘の音のいかなる反響を聞いたか？
ステューヴンは、

《百合ニ飾ラレ輝ク。カコマンコトヲ
歡ビ歌ウ童貞ナンジヲ。ナンジヲ迎エン》

ブルームは、

《へいホー、へいホー、
へいホー、へいホー》

(第17挿話「イタケー」 鼎訳, p. 209)

あのどんよりした目が、死から見つめて、おれの魂をゆさぶって屈服しにかかると。おれだけを見つめて。亡霊蠟燭が母の苦悶を照す。その亡霊の光が歪んだ顔を照す。母の嘆れた甲高い息が恐怖にせいぜいせいぜい喘ぎ、皆ひざまずいて祈った。母の目がおれを打ちのめすように見る。百合のごとく耀く証聖者らの群れ汝を取り囲まんことを。輝かしき童貞らの歌汝を迎えんことを。幽鬼！ 屍食らいの妖怪！

リリアアタ・ルテイランテイウム
百合のごとく耀く
トウルマ・キルクムデト
汝を取り囲まんことを。
ユピランテイウム・テ・ウイルクヌム
輝かしき童貞らの汝を。

くわーん！　くわーん！
くわーん！　くわーん！
くわーん！　くわーん！